

東 風

《 H28 学校生活スローガン あ(挨拶)・す(スマイル)・こ(腰骨)・そ(掃除)・は(履き物) 》

全校生徒；266名 62-0928 文責；校長 岩崎 泰隆



プリムラ・
マラコイデス
(西洋桜草)

本日で一番課業日の多い学期である2学期も終了です。保護者の皆様におかれましては、この2学期間、いえ4月よりの9ヶ月間に渡りまして格別のご支援、ご協力をいただき誠にありがとうございました。

また、申し遅れましたが、2学期末懇談会へのご出席をありがとうございました。重ねて厚くお礼申し上げます。いよいよ平成28年度も残り3ヶ月ばかりとなりました。今後ともよろしくお願いいたします。

さて、本日、2学期の終業式にあたり次のような話を子どもたちにいたしました。いずれも「アニメ」で主人公が発した中でも「名言」と言われるもので、私も「う～ん、深いねえ!」と思った言葉です。

「限界はあるものではなく、
自分で決めるものでござるよ」
(by るろうに剣心)

ところで、『るろうに剣心(けんしん)』とは、以前はアニメで、また、昨年には実写版映画が公開されたため、ご存知の方も多いと思います。もとは和月伸宏氏による漫画です。

その漫画の主人公が、緋村(ひむら) 剣心です。赤髪のやさ男で、左頬には十字傷。元長州派維新志士で、幕末最強とまで謳われた伝説の剣客・人斬り抜刀斎(はつとうさい)として描かれています。明治維新後は不殺(ころさず)を誓い、流浪人として全国を旅し、弱き人たちのために剣を振るっていました(モデルは尊皇攘夷派の熊本藩士で、幕末の実在した四大



人斬りの一人、「河上彦斎」と言われています)。

さて、話を戻します。「限界はあるものではなく、自分で決めるものでござるよ」をどうとらえるかです。「限界を自分で決めさえしなければ、限界など存在しない」と定義付けられそうです。私も偉そうには言えませんが、人は困難にぶつかったとき、また、不安にさいなまれたとき、往々にして「もうこれで限界だ」と勝手に決めつけ、自分の弱さに負けてしまいがちです。しかし、よくよく考えてみると、本当に「頑張ったのか!!」、怪しいものです。「健康を害してまでも」はナンセンスですが、とことん「こつこつ」と、「黙々」と、「がむしゃら」に、今なさねばならないことに邁進(まいしん)することが大切だと思います。

かの著名な詩人；坂村真民(さかむら しんみん)さんの「詩」を思い出しました。

「花は一瞬にして咲くのではない。
大地から芽から出て葉をつくり、葉を繁らせ、成長して、
つぼみをつくり花を咲かせ、実をつくっていく。
花は一瞬にして咲くのではない。
花は一筋に咲くのだ」

これは一つのことを一筋にするということを言っています。一つのことを実践し、それを続けていけば必ず大きなものになるという意味です。「成功とは成功するまで続けることである」という松下幸之助さんの「ことば」もありますが、とにかく続け続けることが大切なのです。

「母ちゃん！平凡が一番だゾ！
人間普通に生きたいと思っても
簡単にいくもんじゃないゾ
だから普通の人生がおくれたら
やっぱりでめたし、でめたしなのさ」
(by クレヨンしんちゃん しんのすけ)



ところで、『クレヨンしんちゃん』は、臼井儀人氏（2009年没）による漫画で、現在もアニメが放映されています。もう20年を超える長寿番組（評価は様々ありますが……）で、また、海外でも人気放映されています。

さて、話を戻します。「母ちゃん！平凡が一番だゾ！ 人間普通に生きたいと思っても、簡単にいくもんじゃないゾ。だから普通の人生がおくれたら、やっぱりでめたし、でめたしなのさ」、をどうとらえるかです。（ちなみに、「でめたし」とは「めでたし」ということです）

ある方の「言葉」がすぐに思い浮かんできます。私の尊敬する人物の一人；故中村久子氏（1968年没）です。彼女は、明治から昭和期に至るまでの興行芸人、作家です。両手・両足の切断というハンデにも拘らず、自立した生活を送った女性として知られています。また、かのヘレンケラーから「私より不幸な人、そして偉大な人」との言葉を受けた人物です。

「当たり前と思っているだけで、当たり前のものは何一つもない」



これは目が見えること、耳が聞こえること、指が動くことなど、ひいては命があること、このことはごく当たり前のことと思いがちであるが、まずはあるという状態に感謝しなければならない、との示唆のことです。以下の「詩」にそのことがよく表されています。

ある ある ある
さわやかな秋の朝 “タオル取ってちょうだい”
“おーい”と答える良人がある “ハーイ”とゆう娘がおる
歯をみがく 義歯の取り外し かおを洗う

短いけれど指のない まるい つよい 手が何でもしてくれる
断端に骨のない やわらかい腕もある 何でもしてくれる 短い手もある
ある ある ある みんなある さわやかな 秋の朝

今から14年前の8月、私は「限界状況にありながらも、強く・希望を持って生きた中村久子氏の生き様」をたどるとともに、「久子氏の次女に直接話を伺うことにより、学年集会での語り（講話）に関する資料化を図る」という目的を達成するために、岐阜県高山市在住の中村富子氏宅を訪ねました。そこで富子氏から、母親；久子氏の思い出や、久子氏から学んだ教訓などの話を伺いましたが、中でも一番印象に残ったことは、久子氏が生前、日々よく「当たり前と思っているだけで、当たり前のものは何もない」と口にされていたということです。

私は帰りに富子氏から「おみやげ」をいただきました。それは「一枚の書」でした。“無心”とあり、それは彼女が口で筆をくわえて書いた渾身の「言霊」でした。“無心”にはいろいろと意味がありますが、「一切グチを言わずに一生懸命に我を忘れて事に熱中すること」ととらえたいと思います。

「生き方」（ただ単に生きているのではなく、また、生きるのではなく、「感謝」して生きることが心をがけたい）や「生きる意味や使命」について、時には真摯（しんし）にみんなが考えるべきと切に思う今日この頃です。



《お断りとお願い》

平成28年としては「最終号」となります。年が明けて「学校だより；平成29年1月10日号」で新年のご挨拶を職員一同として申し上げます。各担任よりの各ご家庭への賀状による新年のご挨拶は控えさせていただきますので、ご理解の程よろしく願いいたします。